

■ そろそろドル安の流れ一服か？！

昨日（14日）まで行われていた米連邦公開市場委員会（FOMC）は、事前の想定よりも些かタカ派寄りの内容であったと閉幕直後の市場は受け止めた模様である。

それは、前日（13日）に発表された11月の米消費者物価指数（CPI）が予想を下回る結果となったことも少なからず影響したと見られる。確かに、弱めの数値結果がもたらしたインパクトと米連邦準備理事会（FRB）が打ち出した政策の方向性に幾ばくかのギャップを感じた向きも少なくはなからう。

そこで、直後はNYダウ平均が一時400ドル超下落し、米10年債利回りは一時3.55%台まで上昇、ドル/円は一時136円近辺まで上昇する動きとなった。

しかし、今回のFOMCの結果によって「米利上げサイクルの終了が見えてきた」と思われることも事実で、そうしたムードが市場に拡がった結果、ほどなくNYダウ平均は下げ幅を縮小し、米10年債利回りは一時3.46%台まで低下、ドル/円は一時134.80円まで下落する動きとなった。

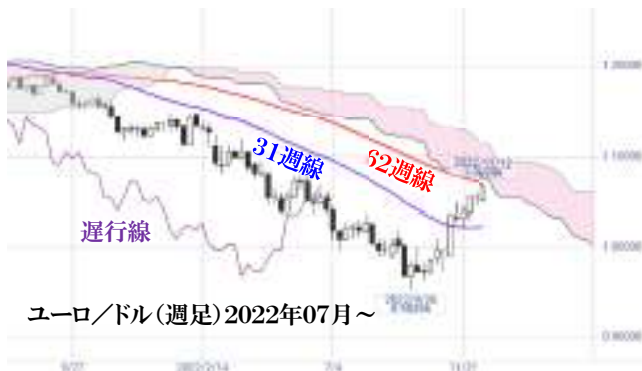
結局、NYクローズだけを見れば前日とほぼ変わらぬ水準での終わりとなり、FOMCの結果やパウエルFRB議長の声明内容、参加メンバーらによる金利予想（ドット・プロット）などは、前回更新分の本欄でも推察したとおり、事前にかんがりの部分が織り込まれていたということになる。

ドル/円は13日、14日と続けて売り圧力が強まったものの、最終的には200日移動平均線（200日線）に下値を支えられる格好となり、今後も200線が下値サポートとして機能し続けるかどうかが一つの焦点となる。仮に、同線をクリアに下抜けた場合、それは昨年2月以来のこととなり、当時の同線は下向きで推移していた。そう考えると、ドル/円の200日線割れは「それなりに大ごと」と言える。

もちろん、ここから一気にドルが弱気に傾くとも思えない。まず、11月の米CPIは予想より弱めだったとは言え、コア指数でも前年比6.0%と、いまだ十分に高いインフレ状況にある。まして、事前予想との差は僅か0.1%ポイントでしかなく、発表後の市場の反応は今回も「行き過ぎ」であったと言わざるを得ない。

今回修正されたドット・プロットを見ても、来年（2023年）中の利下げは想定されていないことが示唆されており、「利上げサイクルの終了が見えてくること」と「利下げが始まること」は明らかに異なると再確認せねばなるまい。

よって、当面のドル/円は200日線に下値を支持されながら、21日移動平均線（現在は137.80円）あたりまでの戻りを試す展開になると個人的には見ている



ユーロ/ドル(週足)2022年07月～

なお、本日は欧州中央銀行（ECB）定例理事会後のユーロ/ドルの動きも注目される。左図に見るとおり、目下のところ週足ロウソクは62週移動平均線（現在は1.0698ドル）と一目均衡表の週足「雲」下限に上値を押さえられる格好となっており、これはなかなか手強い。

ECB理事会の結果に対して、市場が“材料出尽くし”の反応を示す可能性もあると個人的には見ており、とりあえずユーロ/ドルは戻り一巡となることも想定しておきたい。当座の下値の目安は1.05ドル処と見る。（12月15日 10:00）